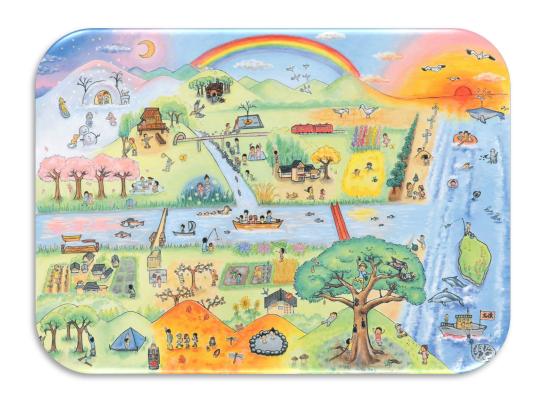
地域・まちあるき活動を通じた交流と学習の可能性



令和 5 年 3 月 大正大学社会教育主事課程

目次

- 巻頭言 「実学教養」としての新たな社会教育・生涯学習の学びの展開を・・・・3 担当教員 出川 真也
- 実習受け入れ先団体の概要について・・・・4 実習学生 宇内 智弘、熊谷 あかね
- I. 実習レポート 1 地域ガイドボランティアが社会に与える影響・・・・6 実習学生 宇内 智弘
- II. 実習レポート 2 コミュニティワークによるまちづくりと人づくり・・・・14 実習学生 熊谷 あかね
- あとがき 自ら望む未来の可能性を授かるために・・・・26 担当教員 出川 真也

巻頭言

「実学教養」としての新たな社会教育・生涯学習の学びの展開を

大正大学社会教育主事養成課程 担当教員 出川 真也

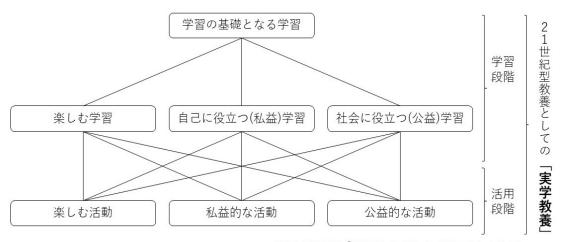
不確実性が高く将来予測が困難だとされる「VUCA」時代の今日、自らの運命を自ら決定しながら、社会課題と向き合い、他者と心を通わせて共に生きようとするマインドと力量が必要とされている。21世紀型教養として、個人と社会の双方を解放することができる、学問と実践を共に育む「実学教養」が求められている。

特に地域社会は、劇的に変動する社会情勢下にあって、常に最新の総合的で普遍的な現実的課題に向き合っている。また昨今、大学は従来とは異なる様々な背景や志向性を持った学生達が集う。ここには新たな学習・教育の可能性が秘められている。

大正大学社会教育主事課程では、これまで、都市部から農山漁村まで、地域社会の多様な学習・実践者の皆さんと交流を通じた学びに取組んできた。その目指すところは、社会教育・生涯学習の学びを通じて、自らの思索を深め自己実現を図るとともに、多様な人々と学び合いながら社会課題に向き合い、取組もうとするものである。自己決定・相互変革型教育を通じた、21世紀型教養としての「実学教養」を形成しようとする学習活動であるといえる。

私たちが目指す実学教養とは「学習の基礎となる学習」(学びの基盤となる力量・マインド)、学問深化の原動力である思索を深めること自体を「楽しむ学習」、自己実現と社会課題達成の双方を視野にした「役立つ学習」、そしてそれら学習成果を活用する段階までを含めた、学びと実践の一連の活動によって構成されるものである(下図、参照)。

今年度、お世話になったとしま案内人駒込・巣鴨は、正に地域においてこうしたダイナミックな学習活動に正面から向き合い、取組まれている方々である。それは共に学ぶ、共に創る、共に育むといったプロセスを伴うものであり、地域づくり・まちづくりの実践と通底する。この学びの一端に実習という形で関わらせていただいたことへ感謝したい。



田中雅文他著2020「生涯学習-学びがつむぐ新しい社会-」学文社 p.35「学習と内容類型」を踏まえて申請者の解釈により作成

実習受け入れ先団体の概要について

豊島区生涯学習団体としま案内人駒込・巣鴨は平成23年(2011)に準備会を立ち上げ、2年間の研修を経て平成25年(2013)に発足した。会員数は、令和2年(2020)現在29名である。男性が16名、女性が13名の20歳代から80歳代までの幅広い年代の人が活動しており、地域のガイドや歴史学習などを通して地域とつながり、社会参加を楽しんでいる豊島区の生涯学習団体・ボランティアガイド団体である。

主な活動として、豊島区、としま未来文化財団、豊島新聞社の後援のもと、豊島区東部に位置する、駒込・巣鴨エリアを中心に近隣の北区・板橋区・文京区の一部地域のガイド活動や学習をしている。

また、地域に関係する講演会・研修会なども随時開催している。平成 29 年 (2017) から 英語でのガイド活動も始め、JICA 研修生や都内大学の留学生を案内している。

(団体ウェブサイト https://toshima-guide.com/ より)

主に行われている街歩きガイドについて

「としま案内人駒込・巣鴨」では定期的に地域やコンセプトを定めた街歩きツアーのボランティアガイドを行なっている。正月時期の初夢ツアーや六義園の紅葉といったその季節ならではのガイドに加え、巣鴨や駒込地域の歴史的・文化的な偉人やスポットを巡るものも企画されている。以下は、「としま案内人駒込・巣鴨」が発行しているパンフレットとホームページを参照し、これまでに行われた街歩きツアーの一部をまとめたものである。

・新春初夢ツアー(一月):

駒込地域を中心に、初夢に見ると縁起が良いとされる「一富士・二鷹・三茄子」にまつわるスポットを巡る。駒込富士神社、鷹匠屋敷跡、天栄寺「駒込土産店跡」(江戸時代より有名だった「駒込茄子」が売られていたことから)など。

・お花見ツアー (三月下旬):

桜の一大品種であるソメイヨシノは駒込が発祥であることから、ソメイヨシノをはじめ とした桜の木々やの観照や、ソメイヨシノの歴史を見ることができるツアー。

・花と庭園を巡るツアー (六月上旬):

北区にある旧古河庭園のバラと庭園や、飛鳥山公園の紫陽花を楽しむコース。飛鳥山は、2021年のNHK大河ドラマ『青天を衝け』のモデルとなった渋沢栄一ゆかりの場所(旧渋沢庭園、渋沢家飛鳥山邸)でもある。

季節の花と共に、旧古河庭園にまつわる歴史や北区の偉人のエピソードを学ぶことができる。★

・田端文士村ツアー(十月下旬):

駒込~田端地域にある文豪や画家などの文化人に関する場所を巡る。田端駅前には「田端 文士村記念館」という建物もあり、ツアーの最後にはその記念館で文豪たちに関する展示品 や貴重な資料も鑑賞することができる。★

・六義園と大和郷を巡るツアー(十二月上旬):

国の特別名勝にも指定されている六義園の紅葉と、大正時代の高級住宅街として名を馳せた本駒込の大和郷について案内を行うツアー。ツツジやモミジといった六義園の美しい紅葉と、その周辺地域の歴史を紹介する。

以上の他、駒込の染井霊園に眠る著名人を巡るツアーや巣鴨地蔵通り商店街を案内するツアーなど、ガイドコースの種類は多岐にわたる。また、「としま案内人駒込・巣鴨」では、ガイドツアーの他に学校などの教育機関に赴いて豊島区周辺の地域の歴史学習を行なったり、巣鴨地域文化創造館地域文化事業の一環として一般の方々を対象とした講演会を開催したりしており、活動内容は幅広い。

なお、今年度の実習で参加した街歩きツアーは、六月の飛鳥山・旧古河庭園ツアーと十月 の田端文士村ツアーである(★印)。



写真 としま案内人駒込・巣鴨のみなさんと実習学生

I. 実習レポート1

地域ガイドボランティアが社会に与える影響

人間学部 教育人間学科 4年 宇内 智弘

キーワード:地域ボランティア、居場所、生きがい、次世代育成

1. はじめに

近年、学生は地域との関わりが薄いという傾向から、大正大学では地域創生学部が創設され、地域と密着した学びが展開されている。このことから、筆者は、今後の社会貢献の要素のひとつとして、「地域との密着」というキーワードが重要なのではないかと感じた。また、筆者は、世界で最も高齢化率が高く、「超高齢化社会」に属している日本において、高齢者の活躍が今後の日本を支えていくと感じている。

超高齢化社会には、様々な問題点がある。医療や福祉のあり方、社会保障制度のバランス、財政や経済成長率の低迷など社会的な問題に加え、働き続けたくても働くことができず満たされない活躍意欲や社会から切り離されてしまう孤立感などから、生活の質(QOL)が低下する可能性があるといった個人的な問題もある。しかし、高齢者が多いからこそ、高齢者が活躍する場や機会が多く存在し、高齢者が活躍する世の中を作ることができれば、健康寿命の延長、子育てのしやすい国、経済の発達、高齢者ひとりひとりの QOL の向上に繋がると考える。高齢者は支援してもらう側ではなく、高齢者ひとりひとりが自ら活躍していく国になっていくことが、超高齢化社会を生き抜くために必要であると考える。高齢者が活躍する場や機会を、検討していく上で筆者は、高齢者の「生きがい」にヒントがあると考えた。

そこで筆者は、高齢者の生きがいや学びの現場を知るために、「としま案内人駒込・巣鴨」というボランティアガイド団体で、令和4年4月から11月までの約8ヶ月間の実習活動に参加した。この実習経験でとしま案内人の方々と関わって、筆者は、そこに居心地の良さを感じ、学ぶことや人と関わる事の楽しさを感じた。ここから、あたたかい居場所を作り、活動をしていくことは、地域作り・地域社会に影響を与え、趣味教養の範疇を超えて、社会に影響を与えていくことができるという可能性を感じることができた。

このレポートでは、なぜ上記のように感じることができたのかを実習内容を紹介すると共に考察していく。

2. 実習の目的・方法

実習の目的は、高齢者の方々で構成される、ボランティア団体内で行なわれる学びの進め方や内部のコミュニケーションの進め方の現状を知る。これらの現状を知ることで、高齢者の生きがいや、地域密着活動が社会に与える影響を考察することができ、将来、地域活動をする上での糧になると考えるため、上記の事を目的とする。

実習の方法は、ボランティアガイド「としま案内人駒込・巣鴨」の活動に参加させていただき、定例会、ツアーガイドの準備、実際にツアーガイドに参加することで、活動の内実を知る。

3. 実習概要

筆者は、団体の一員として、月に1度の定例会に加え、2つのツアー、大正大学 地域創生学部1年生の講座の付き添いの計11回の活動に参加した。

- 【1】定例会(7/17、8/21、9/19、11/14)
- 【2】「旧古河庭園~飛鳥山のバラとアジサイを訪ねる」ツアー (5/29 (リハーサル、お客役)、6/4 (当日・部分ガイド))
- 【3】「田端文士村を訪ねる」ツアー (5/8 (下見)、10/2 (練習会)、11/22 (当日・部分ガイド))
- 【4】大正大学地域創生学部1年生の講座 (10/5、10/6)(次世代育成、多世代交流)

<活動参加日数合計>

各日3時間程度、計11日

4. 実習内容

【1】 定例会(7/17、8/21、9/19、11/14)

月に1度行なわれる定例会は、主に5部構成になっていた。まず一つ目として、「30分研修会」という、メンバーの1人があるテーマについて調べてきたことを発表することから始まる。2つ目が、団体のリーダーである小河さんからの挨拶。3つ目が、前月の活動の振り返り。4つ目が、今後の予定・連絡事項などの確認。最後の5つ目が、全体会終了後の各研修グループのグループ活動をするという流れであった。

その中でも筆者は特に、「30分研修会」と最後のグループ活動がとても印象に残った。

「30 分研修会」は、筆者が参加した会では、「飛脚と産業革命と鰹節」「幕末以降の災害・戦争と巣鴨」「東京大空襲の巣鴨と復興そして今」「ボランティアガイドの四方山ばなし」「巣鴨地蔵通りの今昔」など、どれも興味深く、歴史を知ること

ができる内容で、発表者は写真や地図を使って今と昔を比較したり、パンフレットを人数分用意してくれたりして、聞いていてとても面白く、ためになる話ばかりであった。また筆者は、はじめに「30 分研修会」があると聞いて、大学の講義のように、ひとりが発表することに対して必死にメモを取っていく形を想像していたが、実際は大学の授業のように固い雰囲気は一切なく、ひとりひとりが発表に対してよくうなずき、「なるほど、面白い」といった声があり、発表者もとてもいきいきと発表をしていた。「30 分研修会」は、学ぶ場でありながらも、全員がひとつの発表を楽しんでいるという印象を受けた。

全体会終了後の各研修グループによるグループ活動では、主に筆者はツアーガイドを行なうグループで活動をした。そこでは、ガイドのテーマ設定、見学ポイントの設定、見学コースの検討、どんな資料を使うかといったガイドに必要な情報を検討していく。また、それだけでなく、休憩場所の検討や途中で体調が悪くなった参加者がいたらどうするか、参加者の歩くスピードや、集中力次第で柔軟に予定を変更していくことなども検討していた。1つのガイドを行なうためには、様々な配慮が必要で、想像以上の準備があることを知った。



Ĵ定例会後の集合写真

【2】 「渋沢栄一ゆかりの飛鳥山の紫陽花と旧古河庭園のバラを訪ねる」ツアー (5/29 (リハーサル、お客役)、6/4 (当日・部分ガイド))

このツアーガイドは、旧古河庭園からはじまり、平塚神社や滝野川公園、国立印刷局、七社神社を通り、最後は飛鳥山公園でバラとアジサイを見るコースであった。5月29日のリハーサルは、筆者が実際にお客さん役になって、ガイドを受けていく形式で行なわれた。ガイドは参加者からいかに多くの「へえー」や「なるほど」という言葉を得られるかが大切であると言うことを学んだ。また、リハーサルを行なう中で、どの説明が面白いと思ったか、この説明はあえてしゃべらずに参加者との会話の中で出した方が良いのではないかといった、説明のタイミングにもこだわりや検討がみられた。他にも、参加者が見やすくて他の人にも邪魔にならない立ち位置はどこか、1つのテーマに使う説明は3分以内にすること、段差があるとこ

ろは声をかけるところなど、参加者が楽しめるように考えることに触れることが でき、非常に勉強になった。

6月4日のツアーガイド当日は、筆者はガイド活動はせず、ガイドのサポートや記録写真の撮影、交通の安全確保などを行なった。参加者の中には、高齢者の方だけでなく、都内某区役所の職員の方も参加されていて、町の魅力を伝えるためにはどうすれば良いのかを勉強しに来たと言っていて、ボランティアガイドに参加して得た経験は地域作りの仕事に活かされるかもしれないと感じた瞬間であった。







【3】 「田端文士村を訪ねる」ツアー (5/8 (下見)、10/2 (練習会)、11/22 (当日・部分ガイド)

このツアーは、駒込駅で集合し、大龍寺や東覚寺、様々な文人たちの由緒ある場所を巡り、 最後に田端文士村記念館で歩いたコースを振り返ることができるツアーであった。

下見や練習会では、時間内にガイドを終えることが難しいのではないかというところか

ら始まり、上記で紹介した定例会のグループ活動で、コースの検討がよく行なわれていたが、 テーマに沿ったコースにしようという声からコースが定まった。また、本番が近づくにあた って、リーダーであるメンバーの方が参加できなくなるというトラブルもあったが、みんな で協力して、ツアーガイドを成功させることができたと感じた。

このツアーでは、参加者との「スモールトーク」を大切にしようというテーマがあった。 「スモールトーク」とは、ガイドする場所から次の場所まで歩くときに、参加者の方と軽い 話をするということであり、例えば、「今日はどちらからいらしたのですか」や「今日のコ ースはどんなところが楽しみですか」などの声かけがあると教えていただいた。

参加者の中には、高齢者の方が多かったが赤ちゃんを抱っこした母親もいた。筆者は、スモールトークを実践し参加者の方とのコミュニケーションをとることができ、歩いていて楽しいと感じた。また、筆者は、「山手線で唯一の踏切」と「東覚寺」のガイドを担当させていただき、団体のメンバーが調べてきたことに加え自分なりに調べてきたことも発揮でき、難しかったが楽しかった。スモールトークで話していたからか、参加者の方もよく話を聞いてくれているようで嬉しく感じ、とても感謝している。



【4】 大正大学地域創生学部1年生の講座(10/5、10/6)

この活動は、10月4日から10月6日までの3日間に渡り行なわれた。1日目は、としま案内人駒込・巣鴨の会長である小河さんが大正大学の地域創生学部1年生に「まちあるきの意義とプランニング」の講演をし、その後学生は、まちあるきのプランニング活動を行なった。2日目は、大正大学から駒込地域文化創造館まで大正大学の1年生がガイドする側としてまちあるき活動を行い、その後、駒込地域文化創造館でとしま案内人駒込・巣鴨の方々によるフィードバック及び「まちあるき案内の技術と方法論」の講演があった。最終日の3日目は、学生によるまちあるきの成果報告会と「まちあるき学習と地域づくりへの展開」についての講演でこの講座は終了した。筆者は2日目と3日目の活動に参加した。

その中でも特に印象に残ったのは、2日目の午後に行なわれた、学生のガイドに対するとしま案内人駒込・巣鴨の方々によるフィードバック及び「まちあるき案内の技術と方法論」の講演であった。

大正大学の1年生のガイドはよく調べられていて、とても感心したが、どこか物足りない印象であった。そのガイドのフィードバック及び講演で、改めてガイドテクニックやガイドのマナーの説明があった。ガイドテクニックの中に「説明は短文で簡潔に」という部分があり、筆者は、先ほどの物足りなさは、調べたことを全部言わなければと書き言葉で説明をしていたことだと理解した。他にも、メラビアンの法則の解説や口角を上げるトレーニングなども行なわれ、楽しく活気ある活動で充実した時間を過ごすことができた。



5. 成果

今回の実習を通じて、大学の授業だけでは決して体験することのできない貴重な体験をすることができた。団体のシニア世代の方々やガイドに参加したお客様、年下の学生など、年齢も価値観、考え方の違う幅広い方々との交流から、コミュニケーション能力の向上や、社会教育の幅広い知識を獲得することができた。

また、私は、自分の通っている大学の地元について当初はほとんど何も知らない 状態だったが、実習を続けていくうちに地域の歴史を学び、地域に愛着がわくよう になった。ガイド体験からは、特定の地域を知り、散歩をすることで、地域との繋 がりを深めることができるようになったと感じている。

さらに、ガイドの中には、自身が勉強したことを伝えること以外に、自分の体験を伝える場面があった。例えば、ガイドで次の場所に向かう途中に「ここのお店のハンバーグがとてもおいしいので是非機会があったら食べてみてください。」や、団子が有名なお店の横を通ったときに、「先日ここの団子を食べてみてこんな味でした。」と自分で撮影した写真と一緒に紹介している場面があった。この経験から、

勉強で得た知識だけでなく、自分の体験をどうすれば簡潔に分かりやすく伝わるかを考え、どんどんアウトプットしていくことで、教える側と教わる側双方に満足感が得られるということを学んだ。

今回の実習や、大学の授業のカリキュラムの中でガイド活動に触れたように、地域の歴史を伝えていく側である地域ガイド活動に学生が参加することによって、学生だけでなく団体としての活動の幅も広がるきっかけになり、次世代育成や多世代交流と言った部分で、地域全体のメリットにつながり、社会全体のメリットにも繋がっていくと感じた。

6. 考察

人生経験も浅く、実習期間という短い間にも関わらず、チームの一員として、意見を求めてくれたり、ガイドでの役割を与えてくれたりなど、ボランティア活動ならではの体験ができたと感じた。案内人のメンバーの方々ひとりひとりが、としま案内人の活動にやりがいや楽しさを見出して積極的に話し合ったり、学び合ったりしている姿を見て、協力や会話の中で多くの学びがあり、それが団体そのものの居心地の良さに繋がっているのかもしれないと感じた。

ここから私は、としま案内人の活動をして、家でも学校でもない、第3の居場所 (サードプレイス)の大切さを学んだ。

学び場としての面だけでなく、居場所としての一面も持っている点があり、レイ・オルデンバーグが定義する居場所の説明を利用すると、としま案内人での活動は「サードプレイス」に当てはまると考えた。レイ・オルデンバーグの定義する3つの居場所は以下な通りである。

- ・第一の居場所:自宅(ファーストプレイス)
- ・第二の居場所:職場や学校など(セカンドプレイス)
- ・第三の居場所: 自宅と職場以外の自分だけのリフレッシュできる場所 (サードプレイス)

としま案内人での活動を通じて、サードプレイスが与える影響について考察した。生涯学習施設は利用者にとって自分らしく過ごすための場所や、さまざま人と交流できる場所としての価値が高く、ガイド活動を通じて特定の地域への愛着が育まれる。著名な区民による指導や、区について深く学べる機会を設けることで地域愛を育てることができると考えた。

また、サードプレイスでの活動による居場所は、新たな関わりを生むことができ、新たな関わりは、人々の「生きがい」の1要因になり得ると考察する。私は、人間の「生きがい」に必要なことは、同世代やほかの世代も含む、様々な人と「交流」することであると考察する。はりあいのある活動内容や活動団体は、「交流」を生み出すきっかけに過ぎず、「学び」や「社会貢献」は、居心地のいい場所や交流が

あってこそ進むものと考える。萩原 (2018) によると、居場所は自分と他者との相互承認というかかわりにおいて生まれ、居場所が生成されることで、他者・自然・物事のかけがえのなさを感受する「と述べており、関わりや交流の中で居場所がうまれ、かけがえのなさという、生きているからこそ感じる感情を持つことができる。私自身も価値観の違いを避けて、身構えるのではなく、様々な価値観とふれあうことを楽しみ、何歳になっても成長し続けることが出来るように、人との関わりを大切にしていこうと感じた。

7. おわりに

本レポートでは、としま案内人での活動を通じて、サードプレイスの大切さを学び、他人との「交流」が人の「生きがい」に繋がるということを学んだ。

筆者は、大学卒業後、千葉県の市役所職員として就職が決まった。出身が埼玉のため、馴染みのない土地での生活が始まるが、としま案内人での活動で学んだことを活かし、自分が生活する地域を知り、学び、アウトプットをし、地域への愛着を育んでいきたい。

【謝辞】

実習でお世話になった「としま案内人駒込・巣鴨」の皆様、サポートをしてくださった出川先生にこの場を借りて感謝を申し上げます。この経験を活かして、今後に役立てていきたいと思います。

参考文献

1 萩原建次郎(2018)『居場所 生の回復と充溢のトポス』春風社

Ⅱ. 実習レポート2

コミュニティワークによるまちづくりと人づくり

文学部人文学科 哲学・宗教文化コース 4年 熊谷 あかね

キーワード: 地域発展、コミュニティワーク、ソーシャル・キャピタル

1. はじめに

本レポートでは、令和4年度の生涯学習施設実習において、豊島区内を中心にボランティアガイドを行なっている生涯学習団体「としま案内人駒込・巣鴨」への活動参加を基に、筆者の生涯学習や地域づくりに関する問題意識と、それらに対する考察を主なテーマとする。

現代では、都市部・地方部にかかわらず、地域住民同士の関係性の希薄化が問題視され始めて久しい。人口の一極集中と過疎化、少子高齢化なども要因となっていると言えるだろう。一方で、こうした現状を改善し、居住地域の活性化や住民同士の交流の促進を図る活動に励んでいる人々や団体も数多く存在する。

また、令和4年8月に文部科学省の生涯学習推進課から発行された「第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」では、社会教育や地域学習について次のように述べられている。

本来、社会教育は、地域コミュニティの構成員である住民が共に学ぶものであり、地域づくりの営みという性格を強く持っている。また、社会教育においては、学校教育で取り扱われる内容の範疇に留まらない、社会の変化に即応した様々なテーマを幅広く学ぶことができる。住民自身が主体的に学ぶ意思を持ち、教え学び合う当事者となり、その学習の成果が地域における活動に還元されるような循環が社会教育において生まれることが期待される。¹

このように、地域コミュニティの活性化のためにはその構成員である住民の主体的な学び合いが不可欠であり、個々の住民の学習成果が、一つの地域コミュニティの成長に繋がると考えられるのである。

そこで筆者は、地域活性化のための町づくりにはその活動の担い手となる人々の育成、つまり人づくりが重要であり、二つを同時進行的に取組む必要性があると考える。上述したように、一つの地域や団体といった大きな枠組みの発展とともに、参加している人々の成長・学習も重要なのではないだろうか。また仮に、活動の目的が地域の活性化やコミュニティの発展でないとしても、その活動を継続的に行ったりネットワークが拡大したりすることで、結果的に活動の担い手や参加者が所属する地域に何かしらの還元作用があるとも考えられる。

このことから本レポートでは、現在、東京都豊島区を中心に街歩きのボランティアガイドを行なっている「としま案内人駒込・巣鴨」における実習体験を通じて学んだ「町づくり」と「人づくり」の関係性や、一つの団体としての活動における新たな人間関係の構築がどの

ように行われ、周囲に影響を及ぼすのかという点について、社会学者のエデュアード・リンデマンの著書「成人教育の意味」を参考に、考察を行なっていきたい。

次項からは、筆者が参加したボランティアガイド活動の詳細を、街歩きツアーの内容や写真とともに紹介する。さらに、このような活動を経て、上述のような「町づくり」と「人づくり」という観点から、それらにどのような関係性が見られるのか、また、今後の展望等を述べていくこととしたい。

2. 実習先の概要

今回の実習先であるボランティアガイド団体「としま案内人駒込・巣鴨」の概要に関しては、本冊子に掲載の<実習受け入れ先団体の概要について>を参照。

3. 参加日数と実習内容について

(1)実習参加日数

「としま案内人駒込・巣鴨」への実習として、主に毎月開かれる定例会に加え、ボランティアガイドの練習会および本番に以下の通り参加した。

<定例会出席>

- : 6/12、7/17、10/16、11/14 計4回
- <ガイドツアー「渋沢栄一ゆかりの飛鳥山の紫陽花と旧古河庭園のバラを訪ねる」>
- : 5/29 (リハーサル、参加者役)、6/4 (当日受付のみ参加) 計2回
- <ガイドツアー「田端文士村を訪ねる」>
- : 5/8 (下見)、10/2 (練習会)、10/15 (リハーサル)、10/22 (当日部分ガイド) 計4回

<合計活動日数>

:計10日間

(2)参加した実習内容の詳細

・定例会:各月の定例会では、月次の活動の振り返りや結果報告、今後の予定の確認等を行なう。また、定例会の前に、30分研修として個々でテーマを選び、30分間の研修や発表をする月もある。

・ガイドツアー①「渋沢栄一ゆかりの飛鳥山の紫陽花と旧古河庭園のバラを訪ねる」:

東京都北区にある旧古河庭園を出発地とし、そこから滝乃川公園や国立印刷局を経て、飛 鳥山公園にある渋沢栄一ゆかりの建造物や敷地内の紫陽花を散策するガイドツアーである。 次ページより、ガイドツアーの概要と各参加日の感想を記載する。

◎概要

5月29日

- ・旧古河庭園~飛鳥山公園ツアーの最終確認
- ・メインのガイド:神藤様(3班)
- ・9時50分に旧古河庭園に集合、飛鳥山公園を目指し2時間程度
- ・旧古河庭園→平塚神社→滝野川公園→蚕糸学校跡→国立印刷局東京工場→西ヶ原一里塚 →七社神社→旧渋沢庭園・飛鳥山公園

6月4日

- ・旧古河庭園~飛鳥山公園ツアー
- ・9時20分に旧古河庭園に集合
- ・受付、集金、資料配布にのみ参加

◎感想

5月29日

- ・ツアーの直前ということもあり、本番に近しい形で行った。ルートの把握や案内の仕方も 確実で、楽しそうにガイドをされていたのが印象的だった。
- ・庭園内や移動中に足元が悪い場所や自転車が多く通る道があり、その都度こまめに「下に石があるので気をつけてください」「右に寄ってください(「自転車が来ました」ではなく動く方向を示す)」等の声掛けをしていた。この日は気温が高かったため、「水分補給は大丈夫ですか」等の熱中症予防のための注意喚起もされていた。
- ・それぞれのポイントで、クイズを交えて案内をしており、ただ説明を聴くだけでなく相互的なコミュニケーションを多く取ることができたように感じた。国立印刷局では「2024 年から新しく紙幣に描かれる人物はだれでしょう?」、旧渋沢庭園では「ステンドグラスには何が書いてあるか分かりますか?」等
- ・平塚神社や七社神社では、大河ドラマ「鎌倉殿の13人」やテレビドラマ「浅見光彦シリーズ」など馴染みのある話題を絡めて説明されたことで、身近に感じながら聴くことができた。

6月4日

- ・この日は受付の作業のみの参加だったが、実際にお客様と接する時の空気を体験すること ができた。
- ・お客様の集合時間までには少し余裕があったが、班分けの仕方や受付→集金→資料配布の流れをもっとスムーズにするために、係で確認した方が良いと感じた。案内の順番を予め決めておくことで、お客様も動きやすいのではないかと思われた。

・ガイドツアー②「田端文士村を訪ねる」:

豊島区駒込~北区田端エリアに数多く存在する、文豪や画家といった文化人にまつわるスポットを2時間ほどで巡るガイドツアーである。ガイドコースの最後には、田端駅前にある「田端文士村記念館」に立ち寄り、街歩きの中で見てきた文化人に関する資料や映像の鑑賞もツアーの一環として組み込まれている。以下、ガイドツアー①と同様に概要と各参加日の感想を記載する。なお、このガイドツアー「田端文士村を訪ねる」では、準備段階からツアーの担当グループのメンバーとして下見に参加したり本番のガイドを一部考えて実践させていただいたりと、実習活動の中でも特に深く関わることのできたものとなった。そのため、ここではガイドツアーの内容をより具体的に掲載する他、実際に筆者が使用したガイド原稿も資料の一つとして載せておきたい。

◎概要

- ・10月22日に実施したガイドツアー『田端文士村を訪ねる』の計画~リハーサル~本番をまとめ、感想や気付きを記録する。
- ・基本的なガイドコースやそれに伴う資料の作成は、としま案内人駒込・巣鴨の担当の方々が行ったが、定例会やリハーサルに参加した際に僅かながら意見交換やガイド内容の提案をさせていただいたため、その点に関しても適宜まとめる。
- ・ツアー全体のスケジュールに関しては筆者の都合により参加できなかった日があるため、 実際に参加した日の内容や振り返りを重点的に述べ、不参加となった日については簡潔に 記す。

5月8日

- ・田端ツアーの下下見。この時点では渡辺様(2022年8月より休会中)がメインでコース の検討をしてくださっていた。以下の仮コースを歩き、内容やガイド時間を検討。
- ・この時点でのガイドコースは下記の通り。
 - : J R 駒込駅東口→大龍寺→室生犀星・小杉放庵の居住地跡(現在はセブンイレブン田端3丁目店)→田端区民センター→東覚寺→楽天堂、天然自笑軒→芥川龍之介記念館の建設予定地→室生犀星の庭石(童橋公園)→サトーハチローの案内看板→田端文士村記念館



田端文士村記念館の外観

10月2日

- ・田端ツアーの練習会。本番が近付いてきたため、ガイドの担当箇所等を具体的に決め始めた。また、田端ツアーのメインガイドとして活動されていた渡辺様が同年8月より休会中のため、萩原様、田中様が班ごとのメインガイドとして内容の調整を行なってくださった。
- ・ガイドコースは本番とほぼ同様。5月の下下見の時点に比べ、時間調整のためにコースが変更になった箇所もある。また、ガイドポイント間に高低差があり坂道も多いため、事前にその点を伝えることや、田端区民センターから文士村記念館まで直接行くことができるバスの案内を入れることが検討された。
- ・ガイドコースの最終決定版は下記の通り。
 - : JR駒込駅東口→谷田川→大龍寺(板谷波山、正岡子規の墓)→室生犀星の旧居→「のらくろ」マンホール(田河水泡)→ポプラ坂→田端区民センター(竹久夢二、萩原朔太郎他の紹介)→東覚寺→楽天堂医院・天然自笑軒→芥川龍之介旧居→童橋公園→田端文士村記念館

10月15日

- ・田端ツアーの直前リハーサル。コースは前回とほぼ同様だが、設定されている時間内にガイドを収めるために、話す内容や道順の細部の調整を行なった。
- ・この日は午前にリハーサル、午後に「としま案内人駒込・巣鴨」の定例会が行われたため、 定例会の中でもリハーサルの振り返りやスケジュールの確認をするなど、本番に向けての 準備を進めた。

10月22日

・ガイドツアーの当日。集合場所である J R 駒込駅前でツアーの日程と内容の最終確認を行なう。



J R駒込駅前での打ち合わせの様子

- ・ツアーの参加者は13名。ガイドは2班に分かれて進み、筆者は1班に参加。打ち合わせ後は、ガイドツアー①と同様に参加者向けの資料配布と集金も担った。
- ・ツアーの内容については、主に筆者がガイドを担当させていただいた箇所を中心に掲載したい。また、コースは先述の最終決定版を参照。

まずは、陶芸家の板谷波山と正岡子規の墓石が置かれている大龍寺の墓地である。



大龍寺の本堂(左)と入口の碑(右)。碑には「子規居士墓在」とある。

・板谷波山(本名:嘉七)は明治36年に田端に住居を構え、その後生涯に渡って田端を活動の拠点とした陶芸家である。昭和28年には文化勲章を受章。



板谷波山の墓石。波山の左隣には、妻の玉蘭の名前も刻まれている。

- ・同じ墓地に、歌人の正岡子規の墓石も置かれている。生前の子規は台東区根岸に居住しており、死去したのも同じ地である。根岸に住んでいた子規が田端の大龍寺に墓石を建てた理由としては、生前の彼が数々の病に苛まれていたことが関係する。当時、根岸では既に土葬が禁止され、火葬によって葬儀が行われていた。しかし子規は、死後も火で焼かれるような痛い思いはしたくないという理由から、まだ土葬による葬儀が残っていた田端の地を選んだとされている。
- ・子規の墓石の横には墓碑も設置されており、中央には子規の自筆で自身の生い立ちを綴った文章が刻まれている。その周りには、子規の命日である9月19日が「糸瓜忌」と呼ばれることから、糸瓜の絵も共に彫られている。「糸瓜忌」の由来については、筆者のガイド原稿も参照されたい。





正岡子規の墓石(上段左)と墓碑(上段右)、筆者ガイドの様子(下段)。

・田端区民センターの入口前では、田端地域に居住していた文化人たちを見ることができる。区民センターの付近は「谷田川通り」と言われており、画家・歌人である小杉放菴をはじめ、彼を中心として作られた社交場「ポプラ倶楽部」に集った詩人の萩原朔太郎や室生犀星、美術史家の岡倉天心などが住んでいたとされる。



田端区民センター前の案内板



ポプラ俱楽部に関するガイドの様子

- ・「ポプラ俱楽部」に所属していた詩人・萩原朔太郎についても、コース内で一部ガイドを担当させていただいた。2022年は萩原朔太郎の没後80年を記念して各地で関連のイベントや展示が催されており、筆者の所属する大正大学付属図書館でも「萩原朔太郎大全2022 in 大正大学」と称して特別展が開かれていた。ガイドの中で特別展の広告も用いてイベントの紹介をしたところ、ツアーの参加者の方から「ぜひ大正大学の特別展に行ってみたい」と声掛けをいただき、個別に場所や内容の詳細も説明することができた。
- ・その後も、ゴール地点である田端文士村記念館に至るまで数々の文化人にまつわるスポットを回った。中心となるガイドは引き続き同じ班の案内人の方に行なっていただいたが、ツアーの最後まで適宜参加者の方の質問に答えたり、交通誘導を行なったりした。



芥川龍之介の旧居跡の看板(左)と芥川家にゆかりのある料亭「天然自笑軒」(右)。

<資料>

2022年10月22日

としま案内人駒込・巣鴨 田端文士村ツアー ガイド原稿 (熊谷)

①大龍寺 正岡子規

- ・子規の命日である糸瓜忌から、なぜ糸瓜なのか?
- →子規が患っていた<u>結核</u>を和らげるために、糸瓜の茎から取った水を使っていたため。<u>絶筆</u>3句にも糸瓜が用いられている。

【絶筆3句】

- ・糸瓜咲て 痰のつまりし 仏かな
- ・痰一斗 糸瓜の水も 間にあはず
- ・をとゝひの へちまの水も 取らざりき

・子規の有名な写真は、なぜ横顔のものなのか?

→結核菌により背骨が脆くなる<u>「脊椎カリエス」</u>という病気も患っており、その痛みのため 正面を向いて写真に写ることができなかった。

②室生犀星の住居跡

- ・室生犀星と萩原朔太郎の関係について
- →萩原朔太郎は群馬県前橋市出身の詩人。室生犀星とは、北原白秋が創刊した『朱欒(ザンボア。柑橘類のブンタンの意)』という文芸雑誌に掲載された<u>犀星の詩を読んだ朔太郎が手紙を出した</u>ことから交際が始まり、生涯の友人となる。田端にも 10 か月ほど住んでいた。
- ・「萩原朔太郎大全2022」について
- →今年は朔太郎の没後80年を記念し、各地で萩原朔太郎に関するイベントを開催。
- ※ (チラシを提示) 大正大学の附属図書館でも、12月23日まで特別展を行なっている。
- 一般の方も<u>正門の守衛所</u>に声を掛ければ入講でき、朔太郎にまつわる資料や作品を観る ことができる。
- ※ (チラシ裏面) 図書館内には朔太郎の詩をデザインした栞が置かれている。

4. 考察

本項からは、エデュアード・リンデマンの著書「成人教育の意味」を基に、リンデマンの 展開した理論が、今回の実習で学んだことやくはじめに>で提示した筆者の課題に対して、 どのように結び付けることができるのか考察を行なっていきたい。

(1)リンデマンの「成人教育」について

まず、リンデマンの成人教育に対する基礎的な考えを挙げておきたい。リンデマンは、「成人教育」に関して、単に子どもが受けるような学校的な学習を大人にも受けさせるということではなく、成人ならではの生活経験や社会的責任、歴史性といった特性を基に新しい教育原理を構築するものであるとした上で、成人教育の意味を「生活の意味の探求」と定めた。

さらに、このような「生活の意味の探求」の実現を目指す成人教育には、以下の四つの特徴があると述べられている。

- ①教育は生活である。
- ②成人教育は非職業的な性格を持つ(職業教育後の学習、余暇の活用)。
- ③成人教育は教科ではなく状況を経由してアプローチするものである。
- ④成人教育の資源は、学習者の経験に求められる(行為と思考の近接化)。

それでは、成人教育によって「生活の意味」を「探求」するとは、具体的にどのような行為なのであろうか。これについて、リンデマンは学習者、特に若年層ではなく成人としての学習者において、学ぶことによって次のような要素が向上し、個人のパーソナリティに影響を及ぼすことだとしている。それは、主に知性、力、自己表現、自由、創造性、楽しみ、鑑賞の七つであり、これらの要素は相互的に通じ合っているという。3つまり、絶えることのない知性によって生涯に渡って学習しようとする意欲が学習者としての能力の成長に繋がり、それは社会において自由に自身の特性や多様性を表現することに通じる。そして、そのように創造的に生きることや、他者と自己表現の在り方を互いに鑑賞し、尊重して学習を楽しむことは、学習者のパーソナリティだけでなく、社会全体の発展の実現に関わるのである。

(2)ディスカッションの機能

リンデマンは成人教育において、どのようなことを学ぶのかよりも、どのようにして学ぶのか、つまり、学習の内容よりも方法を重視していた。そこで彼が有用な学習方法として挙げているのが、成人学習者同士が互いに生活している状況を討議する「小集団ディスカッション法」である。ディスカッションは単なる世間話やディベートとは異なり、組織化された話し合いであるとともに、問題を直接的に解決するのではなく、問題やそれを解決する人びとを方向づけるものだという。また、ディスカッションにおいては、参加している学習者それぞれが持つ知識や感情を出し合い、同時にほかの参加者の考えや立場をしっかりと聴いたり、置かれている状況を正しく捉えたりすることも重要となる。

このことから、リンデマンはディスカッションの機能として、①知識と問題解決とを繋げる方法になる、② (相互的な話し合いによって) 学習者を心理的抵抗から解放するという二

点を挙げ、それらは個人の内的感情と外的事実を仲立ちする役割を果たすとしている。4

(3)実習経験との結び付き

それでは、(1)と(2)のようなリンデマンの理論は、今回の実習経験で得たこととどのように結び付けることができるであろうか。筆者が着目したのは、「個人のパーソナリティの成長」と、リンデマンが重視したディスカッションの有用性である。

<参加日数と実習内容について>でも述べたように、「としま案内人駒込・巣鴨」では、外部向けのボランティアガイドに加えて個人が30分程度の発表をする学習会を行なっている。街歩きのガイドにおいても定例会での学習においても、個人やグループ単位で興味のあることや対象の地域について学習し、それらを取りまとめて他者に発表をする場がある、という点では共通している。さらに、このような取り組みが一年を通して定期的に継続して行われている。このことは、リンデマンが個人のパーソナリティの成長に必要だとした知性、力、自己表現、自由、創造性、楽しみ、鑑賞という七つの要素に通じると考えられる。

また、ディスカッションの有用性という点では、「としま案内人駒込・巣鴨」の団体内にて開かれている定例会が挙げられよう。定例会では、その月の活動報告や今後のスケジュールの確認だけでなく、ボランティアガイドを行なうグループごとに話し合いをする時間も設けられており、そこは個人の意見の提示の場となっているのは勿論のこと、団体をより良いものにするために参加者全員が話し合いを進め、各々が役割を持って活動の方向性や課題の解決に向けて意欲的に取り組む場所となっていることが分かった。一般的には、「としま案内人駒込・巣鴨」の会員でなければこのようなボランティアガイド以外の活動に参加することはできないため、実習で同じ場に入らせていただいたことはとても貴重な体験となった。

以上のように、「としま案内人駒込・巣鴨」では案内人自身が常に学び合いをし続けているだけでなく、その成果を他者にツアーガイドや学習会という多用な形で発表し、相互的にフィードバックを行なってそれが新たな活動に繋がるという流れが出来ていると考えられる。こうした循環性のある活動は、団体を安定的に継続・発展させる上で重要であり、常に新しい知識を吸収することで、個人の成長や活動している地域の魅力の再発見に繋がると言えるのではないだろうか。

また、今回の実習でボランティアガイドや定例会に参加する中で、筆者自身が想像していたよりもたくさんの人が、住んでいる地域の歴史や著名な人物について学んだり、それを発信したりしたいと考えており、さらに、それは既に退職をした高齢の方が多いということが分かった。そのような人々の学習意欲に応えられる「としま案内人駒込・巣鴨」のような活動によって、それぞれが住んでいる地域を見つめ直し、振興に向けて学習するきっかけを作ることができるのではないかと考えるのである。

5. おわりに

本レポートでは、「としま案内人駒込・巣鴨」における実習活動を通して、その内容と筆者の考察を、エデュアード・リンデマンの著書「成人教育の意味」を参考に展開してきた。 これらの実習活動と考察を経て、筆者は、地域活動における人間関係の構築や個人の学習意欲の大切さに改めて気付かされた。地域の活性化や町づくり活動を行なうにあたって、その 地域のニーズや問題を見つけ出すことは重要であるが、それと同時に、一緒に学び合ったり 安心して自己表現のできたりする環境を形成することも必要だということを、この「としま 案内人駒込・巣鴨」の実習に参加することで学び取ることができたように思う。

筆者は大学卒業後、キャンパスのある東京都を離れ、出身地である新潟県へ戻って就職をすることとなっている。しかしながら、今回の実習や生涯学習施設実習の授業の中で学んだことは、卒業後にも十分生かすことができると考えている。特に、一つのコミュニティにおける人間関係の構築方法や、話し合いーディスカッションの大切さなどは、その重要性を特に実感している。今後も、このような学習成果を得て地元に就職する身として、改めて自身の地元を見つめ直し、少しでも地域貢献に繋がるような学習をしていきたいと考える。

謝辞

この度の生涯学習施設実習に関しまして、実習先である「としま案内人駒込・巣鴨」の皆様には、大変お世話になりました。約7か月という短い期間にも関わらず温かく迎え入れてくださり、無事に実習を終えることができたのも、偏に案内人の皆様のご尽力あってのことだと思っております。誠にありがとうございました。「としま案内人駒込・巣鴨」の益々のご発展を心よりお祈りいたします。

また、今回の実習の手配やレポート執筆の指導を担ってくださった出川真也先生のサポートがなければ、学生時代にこのような貴重な経験や、素晴らしい方々と出会うことは多くなかったと思います。出川先生にも、心より御礼申し上げます。

参考資料

- ・「としま案内人駒込・巣鴨」ホームページ https://toshima-guide.com/
- ・エデュアード・リンデマン著 (1926) 堀 薫夫訳 (1996)「成人教育の意味」学分社
- ¹ 文部科学省「第 11 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理(本文)」 https://www.mext.go.jp/content/220922-mxt_syogai03-000024695_1.pdf(2023 年 1 月 11 日閲覧)p7 より引用。
- ²「成人教育の意味」(1996) p6~7 より参照。
- 3 同上 p 10~13 より参照。
- 4 同上 p122~124 より参照。

あとがき

自ら望む未来の可能性を授かるために

本年度をもって、本学における社会教育主事養成課程は廃止となる。この決定は、本学経 営陣の判断であるが、今後求められる教育や学習のあり方を見据えると、大変残念である。

とはいえ、当課程を担当してきた教員としては、これまで本課程運営を通じて、様々な機会を得ることができた。学問的な知見蓄積はもちろん、受講する学生達はじめ、熱心に学びに取組む多くの地域の魅力的な人々と出会い、人脈を構築することができた。これらは私自身のこれまでの学習概念や教育観を変えるものであった、かけがえのない宝物である。

昨今、世界情勢を見まわすと、少しずつ悪い時代になってきたように思える。そのような中で、社会教育・生涯学習の営みのみが、無条件に純粋無垢の正義を掲げられるものではない。ともすると、不条理な社会情勢の中で、変質し、その拠って立つ学びの土台を、自ら掘り崩してしまう言動に無自覚に加担する危険が、常に隣り合わせている。このことはこれまでの歴史からもうかがい知ることができることである。

だが、このような時代だからこそ、自己を見つめ、人々と共に学び合おうとすることを追求しようとする社会教育・生涯学習の本来の活動を、時に厳しい試練にも立たされるだろうが、決して諦めてはいけないと思う。社会教育・生涯学習の取組こそ、「学習権宣言」が唱える、人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていく、人間的な尊い営みに直通するものだからである。

私自身、教育学者・社会教育士としての研究、教育、そして実践の旅は続く。引き続き社会教育・生涯学習の学びを通じた地域づくりとひとづくり(そこにはむろん自分自身の「我づくり」も含まれる)に取組んでいきたい。

人は、学ぶことによってはじめて、望む未来の可能性を授かることができるのだから。

2023 年春 巣鴨にて 満開の桜を眺めつつ 大正大学社会教育主事養成課程 担当教員 出川 真也

令和4年度生涯学習施設実習・研究活動報告 地域・まちあるき活動を通じた交流と学習の可能性

発行日 令和5年3月31日

発 行 大正大学社会教育主事養成課程

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1